

日本の諸宗教 —研修と対話—

NCC宗教研究所 研究員 寺本知正

1. 活動の目的

ヨーロッパは、長い間キリスト教社会であった。そのため、学校教師や教会聖職者の教育も、人口のほとんどがキリスト者であることを大前提としてすすめられてきた。しかし最近数十年の間に多くのイスラームの人々、ヒンズーの人々が移住してきており、誤解にもとづく争いなども起こっている。異宗教間の相互理解や協力は大きな社会的課題である。学校教師や聖職者の教育においても、この現実をふまえて、他宗教の実地学習や対話・協力の経験をつむことの必要性が痛感されている。

NCC宗教研究所では、毎年数名の学生をうけいれて、日本の諸宗教を学び、また諸宗教の人々との対話交流の経験をつむプログラムを、2002年秋学期より開始した。

日本は古くから多宗教が混在する環境にあり、神道、仏教、儒教やキリスト教をはじめとした諸宗教が共存している。日本は宗教の多元性の観点において、大きな貢献をする可能性をもっているといえる。ヨーロッパの将来の宗教指導者となる学生が、日本の宗教的環境に身を置き、日本の諸宗教を学ぶことで、体験と知的学習に基づいた平和の実現へのリーダーシップを発揮することのできる教育を提供することが、当活動の目的である。

2. 活動の内容と方法

「日本の諸宗教—研修と対話—」プログラムは、海外の学校制度にあわせて二学期制とし、半年間を一学期（セミスター）とした、一年間のプログラムである。日程は、秋学期を10月から翌年の3月、春学期を4月から9月とする。このプログラムは、基本的に、(a) 日本の諸宗教に関する講義、と (b) 各宗教教団における研修と対話、とによって構成される。また、学期中には学生は、研究所主催のセミナー、当プログラムの特別講演、諸宗教の人を招いての交流会にも参加する。

また、ヨーロッパの大学では日本の大学と大学暦が異なることから、秋学期に学生が集中することを昨年度までの実績に振り返り、一学期間だけのプログラム参加においても、日本の諸宗教の全体を学生が学ぶことができるように、学期ごとのプログラムも充実したものとする。

(1) 日本の諸宗教に関する講義

全講義が英語による講義であり、日本語未習得者のために日本語語学講義も設けられる。各講義とも、毎週1講義時間（90分）を設け、10週間での全10講義時間を以て一学期の講義とされる。各講義は、一学期ごとに各分野を通史的に履修できるが、一年間（二学期）をもって、日本の代表的諸宗教がすべて履修できるカリキュラムである。しかしながら、秋学期に学生が集中することを鑑み、2005年度は「日本のキリスト教」講義において、日本のキリスト教史と日本のキリスト教神学を学期割り当てせず、一学期間に講義する。また、来年度以降、他の講義に関しても一学期間で日本の代表的諸宗教を講義するものとする。

①神道と日本の民俗宗教

- 秋学期 神道
- 春学期 日本の民俗宗教
- ②日本の仏教
 - 秋学期・春学期とも通史的に仏教を講義するが、学期によって、異なる仏教者・宗派を扱う
- ③日本の新宗教
 - 秋学期・春学期とも通史的に新宗教を講義するが、学期によって、異なる新宗教を扱う
- ④日本のキリスト教
 - 秋学期 日本のキリスト教史および日本のキリスト教神学
 - 春学期 日本のキリスト教史および日本のキリスト教神学
- ⑤宗教の神学および宗教間対話の論理
 - 秋学期 宗教の神学
 - 春学期 宗教間対話の理論
- ⑥仏教テキスト講読
- ⑦日本語語学

(2) 各宗教教団における研修と対話

各宗教教団での実地研修は、関西圏に本山・本部を持つ教団には講義期間中を利用して訪問し、関東圏および東北・九州などの遠方地へは、講義期間外に研修旅行として訪れる。

訪問に際しては、各宗教教団には、宗教施設の案内、儀礼の紹介および参加、宗教生活に関する紹介などの便宜をいただき、信仰者との対話を通じて、各々の宗教への理解を深める。

また、ヨーロッパとは事情の異なる日本のキリスト教教会で実習を経験することで、他宗教との共存におけるキリスト教への理解と日本の宗教環境への理解をより深める。

3. 活動の実施経過

(1) 運営委員会の実施

プログラムの運営は、アドバイザー（諮問）およびエグゼクティブ（実行）の二組織の運営委員会が、予算・決算、講義カリキュラムの承認、学生の受講承認などの通常重要事項を、両運営委員会による合同会議によって審議する。また、プログラム実施上にその時々問題となる事項も、同会議によって審議される。

アドバイザー（諮問）委員会は、主としてプログラムの運営全体に関わる事項審議に従事し、エグゼクティブ（実行）委員会は、運営上の個々の問題にも対処し、それぞれが担当する問題の実際上の実行にも従事する。

運営委員会メンバー

《アドバイザー委員》

- ヤン・ヴァン・ブラフト（南山宗教文化研究所元所長）
- 藤本浄彦（仏教大学教授）
- 前島宗甫（元日本キリスト教協議会総幹事・NCC宗教研究所理事）
- 水垣 渉（京都大学名誉教授）
- 幸日出男（同志社大学名誉教授・NCC宗教研究所理事）

《エグゼクティブ委員》

- 片柳栄一（京都大学教授）
- 高田信良（龍谷大学教授）
- 中道基夫（関西学院大学助教授）

ペテロ・バーケルマンス（オリエンズ宗教研究所）
林 忠良（関西学院大学名誉教授）
樋口 進（関西学院大学教授・NCC宗教研究所理事）
宮庄哲夫（同志社大学教授）
水谷 誠（同志社大学教授）
マルティン・レップ（龍谷大学教授）
ロバート・ローズ（大谷大学教授）
寺本知正（NCC研究所研究員・プログラム事務担当）

2005年秋学期および2006年春学期の運営のためのアドバイザーおよびエグゼクティブ両運営委員会の合同会議は、2005年7月に開催され、応募学生の承認やカリキュラムの構成、予算などの諸事項が審議、決定された。また学期中には、計5回開催され、進行中のプログラムに関する諸事項が審議され、決定された。

また、カリキュラムの講義内容とスケジュールおよび実地研修・研修旅行のスケジュール構成に関して、各講師と実行委員による詳細な調整が行われた。

通常審議事項の他に当年度に審議され決定された事項に大きなものが三つある。一つは、学生の居住場所の恒常的な確保に関してであり、京都国際学生の家が確保された。二つには、周辺の大学との提携の可能性に関してであり、来年度より創設される京都宗教系大学院連合に協力校として参加することで、参加する各大学院での開講科目と当プログラム講義との相互聴講制が設けられることとなる。また、三つには運営委員会の体制改革が実施された。2006年度からは、林忠良を委員長とする一委員会制となり、特にプログラム実施に関しての実務を担うものとして、林忠良、マルティン・レップ、宮庄哲夫、寺本知正とによる実務委員会が設けられることとなった。

（2）プログラムの実施

2005年秋学期には正規受講生3名および聴講生4名の参加によってプログラムが実施された。

（3）レセプション

2005年秋学期では、学生を歓迎するためのレセプションが、運営委員会主催で開催された。NCC研究所理事を招待し、2005年9月28日に開催された。

（4）特別講演

各セミスターでは、学生の歓迎およびプログラムの外部への貢献を趣旨とした、公開特別講演が、運営委員会主催で開催される。2005年秋学期は、11月26日にマイケル・パイ氏（マールブルク大学名誉教授、国際宗教学・宗教史学会元会長）による講演「宗教対話と宗教教育— 宗教学から考える—」が開催された。

（5）プログラム参加学生

2005年秋学期には、正規受講生として3名、聴講生は4名であった。

《プログラム正規受講学生》

ドイツの大学から2名、ノルウェーの大学から1名、計3名の学生が、プログラムを正規受講した。

- (1) 男性、ドイツ人。ドイツ・グライフスヴァルト大学神学部学生。ハノーバー教会員。
- (2) 男性、ドイツ人。ドイツ・ゲッティンゲン大学神学部学生。チューリンゲン教会員。
- (3) 男性、ノルウェー人。ノルウェー・トロムセ大学博士課程宗教学専攻学生。

《プログラム聴講生》

2005年秋学期には、2名の外国人および2名の日本人が聴講参加した。

- (1) 男性、大学教授
- (2) 女性、京都大学留学生
- (3) 男性、博士課程学生
- (4) 男性、研究所研究員

(6) 講義の実施

セミスター準備期間において、担当責任講師と実行委員による詳細な講義計画が立てられた。各講義においては、各担当責任講師が講義を担当するとともに、専門領域に関しては他の講師を依頼して各講義全体のコーディネートも担当する。

秋学期に学生が集中することを鑑み、2005年度は「日本のキリスト教」講義において、日本のキリスト教史と日本のキリスト教神学を学期割り当てせず、一学期間に講義することとなった。

各講義では、専門性の高い領域に関して、新たに専門講師を迎えることができ、より充実したカリキュラムを実施することができた。新たな講師は以下の通りである。

- ・ 神道 櫻井治男 (皇学館大学教授)
- ・ 日本の仏教 アンナ・ルッジェリ (京都外国語大学教員)
- ・ 日本の新宗教 吉永進一 (舞鶴工業高等専門学校教員)
- ・ 日本のキリスト教 粟津原淳 (NCC研究所研究員)

① 講義日程

《2005年秋学期》

- ◆ オリエンテーション期間
2005年9月20日より22日
- ◆ 講義期間
2005年9月27日より12月2日

② 講義カリキュラムおよび講師

- ◆ 神道
担当責任講師：ペトロ・クネヒト (南山大学教授)
 - ・ 神道概論 (1 講義時間)
講師：櫻井治男 (皇学館大学教授)
 - ・ 神道の実践 (2 講義時間)
講師：大垣豊隆 (前伊勢神宮教学科長)
 - ・ 神道- 神話から国家神道まで- (6 講義時間)
講師：ペトロ・クネヒト
 - ・ まとめ (1 講義時間)
講師：幸日出男 (同志社大学名誉教授)
- ◆ 日本の仏教
担当責任講師：ロバート・ローズ (大谷大学教授)
 - ・ 日本仏教入門および奈良時代から鎌倉時代の仏教 (6 講義時間)
講師：ロバート・ローズ
 - ・ 日本の禅仏教 (2 講義時間)
講師：アンナ・ルッジェリ (京都外国語大学教員)
 - ・ 日本の近代仏教 (1 講義時間)

- 講師：寺本知正（NCC宗教研究所研究員）
- ・まとめ（1講義時間）
講師：ロバート・ローズ
 - ◆ 日本の新宗教
担当責任講師：マルティン・レップ（龍谷大学教授）
 - ・日本の新宗教入門および神道系・仏教系の新宗教（4講義時間）
講師：マルティン・レップ
 - ・神道系・仏教系の新宗教（3講義時間）
講師：吉永進一（舞鶴工業高等専門学校教員）
 - ・新々宗教およびまとめ（3講義時間）
講師：マルティン・レップ
 - ◆ 日本のキリスト教
担当責任講師：幸日出男（同志社大学名誉教授）・水垣 渉（京都大学名誉教授）
 - ・日本のプロテスタント史（4講義時間）
講師：栗津原淳（NCC研究所研究員）
 - ・キリシタン史（2講義時間）
講師：東馬場郁生（天理教校講師）
 - ・日本のキリスト教神学（3講義時間）
講師：水垣 渉
 - ・まとめ（1講義時間）
講師：幸日出男
 - ◆ 宗教の神学
担当責任講師：ヤン・ヴァン・ブラフト（南山大学宗教研究所元所長）
 - ・宗教の神学（10講義時間）
講師：ヤン・ヴァン・ブラフト
 - ◆ 仏教テキスト講読
担当責任講師：ヤン・ヴァン・ブラフト
 - ・『宗教とは何か』（西谷啓治著）講読（10講義時間）
講師：ヤン・ヴァン・ブラフト（*講師の健康上の理由により欠講になった。）
 - ◆ 日本語初級
講師：栃原玲子（園田女子大学教員）

（7）実地研修の実施

実地研修は、（1）講義期間中に関西圏に本山・本部をもつ各宗教教団を各週に訪問する研修、および（2）講義期間外に関東、東北、九州などの遠方地へ各年に一度訪問する研修旅行、によって実施される。

また、日本のキリスト教会における研修も充実が図られた

≪ 2005年秋学期 ≫

（1）研修

- ◆ 諸宗教教団施設における研修

【神社】

吉田神社、下賀茂神社（以上京都市内）（久山雄甫氏の案内による）、春日大社、手向山神社（以上奈良市内）を訪問

【仏教寺院】

東大寺および興福寺(以上奈良市内)、大徳寺(松波諦雲師から禅の実践と講義の研修を得る)、天竜寺(トーマス・キルヒナー師から禅の実践と講義の研修を得る)、平等院(市川定敬師からの研修を得る)、西本願寺(寺本知正からの研修を得る)、比叡山延暦寺を訪問(府上征三師の案内を得る)

【新宗教】

天理教本部およびおやさと研究所を訪問(東馬場郁生氏〈天理教校講師〉による研修を得る) 創価学会関西文化会館(大阪)訪問(代表者たちによる研修を得る)

【キリスト教教会】

日本聖公会奈良基督教会(奈良市内)を訪問(古賀久幸師による研修を得る)

【提携研究所】

イタリア国立東アジア研究所、フランス国立極東研究所(以上京都市内)を訪問。

◆ キリスト教教会における実習

【講義期間中の実習】

神戸において、中道基夫(関西学院大学助教授)より、「日本におけるキリスト教土着化の問題」に関して、講義と教会研修を受ける。

(2) 研修旅行

2005年秋学期の研修旅行は九州圏で実施された。旅行には、市川定敬師が同行し、学生のお世話をいただいた。

◆ 実施日程：2005年12月5日から11日

【西南学院大学】(福岡市内)

寺園喜基西南学院院長より、日本のキリスト教神学に関する講義を受け、学院学生との交流および議論の機会を得た。また、福岡では太宰府も訪ねた。

【長崎市】

原爆資料館、日本二十六聖人記念館、大浦天主堂、長崎孔子廟中国歴代博物館

【真命山諸宗教対話・靈性交流センター】(熊本県)

仏教との宗教間対話および靈性交流を実践する修道院において、修道院生活を経験する。フランコ・ソットコロラ神父とマリア・ディ・ジョルジ修道尼による講義を受けた。

4. 活動の成果

活動成果の主眼目は、二点に集約される。一つには、何よりも、このプログラムに参加した、将来、教会の聖職者や学校の教科担当教師となる学生が、自分の育ってきた宗教以外についての正確な知識を得て、それによって寛容な精神、宗教間相互理解の重要性の認識をもち、自己の宗教伝統への謙虚な反省心のある指導者となる研修の場を提供できたことである。

二つには、このプログラムの存在と実施自体がもたらした成果である。当プログラム実施にあたり、宗教界内外から、プログラム理念への理解と実施の協力を得ることができた。そのことによって、宗教間、宗派・教派間の信頼関係、協力関係が、さらに促進された。このことは、学生にとっては、宗教間対話・宗教間協力、そして宗教の平和的共存の現場に正しく立ち会わせていることになる。

以上の2つの視点から、(1) 講義、(2) 実地研修、(3) 外部からの評価、(4) 協力者

(5) 学生の成果、に関して成果をまとめてみたい。

(1) 講義

日本の諸宗教を、英語によって講義するという点は、当プログラムの講義の非常に革新的な点であ

る。そのことによって、海外の諸大学や諸研究機関において日本の諸宗教を学ぶのではなく、日本に滞在して日本の諸宗教を学ぶことが可能となった。

また、日本の諸宗教を包括的に講義することにおいて、少数の講師がすべての諸宗教を講義するのではなく、各々の分野を専門とする多くの研究者が講師として講座を担当することも、当プログラムの大きな特徴である。このことにより、他宗教に関する偏った知識に基づいた誤解や先入見が正され、正確な知的理解を得ることが可能となった。また、各々の立場から各専門分野が講義されることによって、他宗教を一面的に解釈するのではなく、広く体系的に理解することも可能となる。

他宗教の伝統を理解していくこととは、他宗教を問うと同時に、自らの宗教伝統を問い返していく作業である。およそ、他宗教の伝統に対する一面的な解釈とは、もとを正せば自らの伝統に関する一面的な理解に端を発すると言えよう。その点において、当プログラムの講義では、多数の講師による多面的な講義が、学生をして自らの伝統や立場を問い返す視点を多面的に得るということになる。それは、「自らの伝統の立場から他の伝統を一面的に解釈し位置づけようとする」ことから、「自らの立場を相対化して他の伝統を理解しようとする」ことに転換していく作業である。そのことは、学生の諸宗教理解に大きな成果をあげたと考えられる。

このような講義を通して、学生は他宗教の理解を進めると同時に、自らの宗教への理解も深めることになる。現実には大きな摩擦の原因となっている自他への一面的な偏見を乗り越え、他にも自らにも謙虚になって学ぶ姿勢が、宗教間の相互理解と共生をはかることにとっては重要である。その観点から、当プログラムの講義は大きな成果をあげたものと考えられる。

(2) 実地研修

諸宗教教団における研修では、多くの教団から協力をいただくことができた。訪問に際しては、各宗教教団には、宗教施設の案内、儀礼の紹介および参加、宗教生活に関する紹介などの便宜をいただいた。信仰者との対話を通じて、講義における他宗教の知的理解だけではなく、実地に各々の宗教との交流を持ち、活動や信仰者の人格を通じて理解を深めることができた。

また、研修旅行では、2回の特別講義が実施された。

(3) 外部からの評価

ここでは、当プログラムに関する記事が他団体機関誌に掲載されたものを紹介することで、外部からの評価を得ていることを示したい。また、プログラムの理念と実施が、メディアで紹介されることでもたらされる社会への波及効果を、成果の一つとして考えたい。

プログラム受講後に、母国に帰国する学生との連絡を保ち、宗教間相互理解と共生の理念に基づいた宗教活動や教育の場での彼らの活躍の一助となり続けることができるように、体制を整えることも大きな継続課題であった。このことに関して、EMSは、2005年3月に「東アジアとドイツの出会い会議」を開催し、日本の多宗教環境において学習と研修の経験を積んだ6名のプログラム受講生たちの発表を通じて彼らの意見を内外に広めた。また、受講生たちは、それぞれに機関誌や新聞にプログラムでの経験を発表しており、当プログラム受講者のヨーロッパにおけるネットワークは拡がりつつある。

「多宗教共存」ニホンに学べ」（『京都新聞』2005年11月29日夕刊）

(4) 協力者

2005年秋学期では、国際学生の家より、学生滞在の協力を得ることができた。今後とも当プログラム受講生の滞在先としての協力をいただけることとなった。

そして、庭野平和財団からは、助成をいただき、この助成によってプログラムが実施可能になったといっても過言ではない。

また、イタリア国立東アジア研究所、フランス国立極東研究所、京都ジャパン・ファウンデーションからは、図書館提携の便宜を受け、学生がそれぞれの図書館を利用できる。

(5) 学生の成果

以下に当学期正規受講生の学生のコメントの一部を紹介したい。

「今日のドイツ（おそらくすべての西欧世界）においては、宗教は単一から多宗教の状態へと変化しており、このことがNCC宗教研究所のISJPプログラムに参加を希望するきっかけとなりました。

NCC宗教研究所は、キリスト教の教会と日本における他宗教との橋渡しをしています。ここでは神学的研究と実践とが、とても有意義な仕方結びついています。さらに当プログラムは、日本文化と歴史を理解する上で、貴重なアプローチを提供してくれます。

私が日本にきてから最初の二ヶ月は、日本で生活し学ぶための最初のステップでした。一連の講義、フィールドトリップ、読書、またプログラムに参加している人たちとのディスカッションを通して、神道や仏教といった日本の伝統的宗教や、天理教、立正佼成会といった新諸宗教に関する様々な情報を得る機会に恵まれました。学びの機会を与えられたことにとても感謝し、このプログラムで得た成果をドイツに帰国してからも、私の神学研究と将来のルーテル教会牧師の働きに生かしていきたいと思っています。」
(男性、ドイツ・グライフヴァルト大学学生)

「私が京都にきた理由は二つあります。まず一つ目は、NCC宗教研究所で行われるプログラムに参加することです。最近のヨーロッパにおいて、キリスト教はかつてのように主要な宗教とは言い切れない状況にあります。そのため、多宗教が存在する日本の社会は、ひとつの文化の中で諸宗教がある程度平和に共存していくためにはどうしたらよいか考えるうえで、大きなヒントを与えてくれます。もう一つの理由は、日本の文化に直接触れてみたいということです。

いまのところ、私の期待は十分に満たされています。NCC宗教研究所における学びは、単にキリスト教の視点から“他”宗教に関する知識を得るだけではなく、日本文化への深い洞察力を得る事にも繋がりました。その一方で、諸宗教の幅広い現象にも気づくようになってきました。日本では、わたし達はドイツにいるとき以上に、より多くの異なる宗教と出会います。一方、日本のような外国文化と出会ったとき、自分自身の文化的背景から形成されている通常の諸概念は、ある程度見直されるということも学びました。

ISJPは、わたしの想像以上のものを提供してくれています。このプログラムの重要性は、ヨーロッパにおいて他宗教との建設的な協力関係を推し進めるためのトレーニングという実践神学的な目的のみに限定されるものではありません。様々な局面において、私たち自身の視点が広げられるということが、このプログラムによってもたらされる重要な点です。」

(男性、ゲッティンゲン大学学生)

5. 今後の課題

多宗教間の対話シンポジウムや会議の開催が望まれる。学生にとっては、日本における諸宗教間の相互理解と共生が、対話という場面でどのように具体的に展開されるかを体験する事は重要である。対話には、知識や理念を前提とした上での具体的な対話経験の積み重ねが非常に重要であり、そのような対話によって宗教間の協力や信頼関係が進展する。このような機会をより増やしていくことが望まれる。